

# 中国哲学書を読みあさった湯川少年

## —偉人湯川博士を支えた

### 二人の女性—



京都大学基礎物理学研究所所長室にて

理工学部 教授

宗 像 恵

湯川少年を支えた母親の一言 敗戦後の貧しい、荒さんだ3流国日本で、湯川秀樹博士が日本で初めてノーベル物理学賞を受賞（昭和24年）されたことが、どれほど日本国民に自信と勇気を与えてくれたかは測り知れないものがあった。当時、筆者は8才であったことになるが、そういう世代の人間にとって“湯川”は物理学者である前に社会的英雄であり、偉人だった。

「それにつけても思い出されるのは湯川先生がノーベル賞を受けられた昭和24年頃であります。私は医学部の助教授でありましたが戦後の窮乏のあけくれの中に疲れることのみ多い毎日を送っていましたが、『1949年度ノーベル賞物理学賞日本の湯川教授に』との新聞報道は同じ科学研究に携わる私共に衝撃的感動を与えました。その夕べの帰途にみた時計塔の灯は吉田山を背景にくっきり浮かび輝いてみえました。」これは昭和53年11月に催された基礎物理学研究所創立25周年記念式典で岡本道雄京大学長（当時）が述べられた祝辞の一節である。こうした感慨はひとり研究者のみでなく日本国民全体についていえたことだと思う。

ところで、湯川博士の少年時代はどんなものであったのであろうか。博士の著書「目に見えないもの」からその一部を知ることができる。

『私達兄弟は皆小学校に入る前から母方の祖父に漢籍の素読を教わった。大学、孝経、論語、孟子というところから始めて、学校時代に十八史略、史記、春秋左氏伝と随分いろいろ習った。毎日夕飯が済むと離れへ行く。祖父は漢籍の大きい字を一字一字、字つきでつきながら読んで行く。私はちっともわからないが、ただただそのあとについて繰り返す。だんだん眠たくなってくのに祖父はなかなかやめてくれない。とうとう悲しくなって、しみのはいった本の上にぼとりと大きな涙が落ちる日もあった。祖父は年を取っても足が達者で、毎日散歩する。頭が白く、あごの下にも白いひげをはやしていた。紀州の藩士として長州征伐にも従軍したという文字通り昔の人だった。

一年生の受持の川村先生は大変良い先生であったが、転任なされたので、確か二年生の時から、塩尻先生に習ったように記憶している。卒業までずっとこの先生の受持であった。こと真面目な方であった。私はこの先生の信用が特に厚かった。ある学芸会のことであった。どうした訳か、私は一度も練習せずに演壇に立つことになった。「菅原道真」という読本の一章を暗誦するのである。さて壇に上がって金屏風を背にして大勢の生徒や父兄を前に立っていると、はじめの一句がどうしても思い出せない、とうとう真っ赤になって壇から降りた。先生はかわりに級友の横田君を出させた。私は皆に顔をみられるのが恥ずかしいので誰もいない校庭に出た。隅の方にある池の側に立って、ぼんやりおたまじゃくしを見つめていた。いま思い出しても冷汗が出る。先生はその折少しも私をおしかりにならなかった。私はなおさら心苦しかった。』

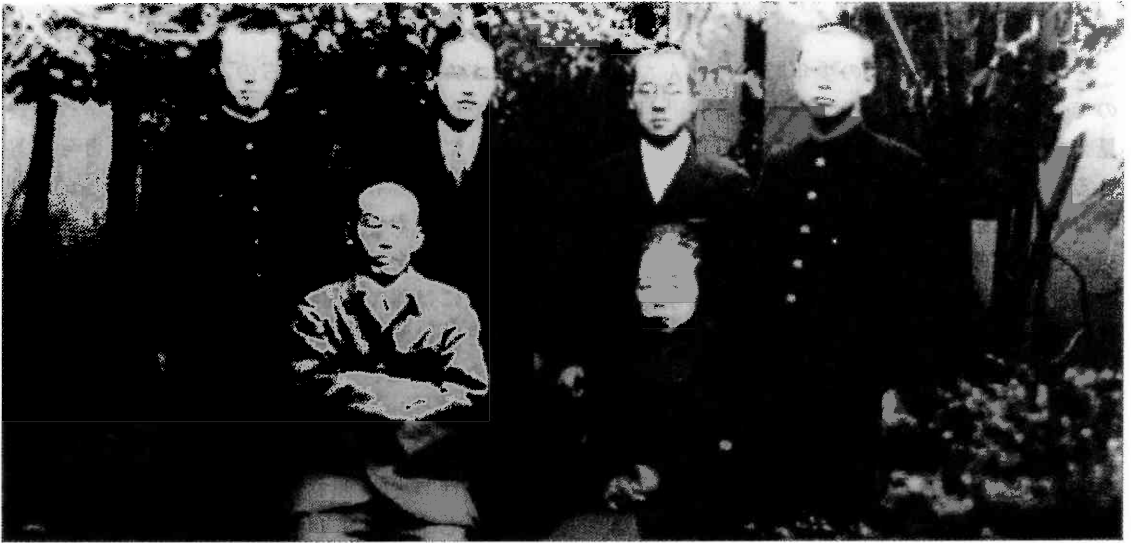
湯川少年は人との交わりをさけて、ひたすら読書にうちこむ日々を送り、立川文庫から「レ・ミゼラブル」まで濫読するという、い

くぶん空想的なところのある少年だった。外見では目立たない子であったが、小学校の終わりごろから急に頭角をあらわし、自分で等差級数の総和を求める方法を考え出し、周囲をおどろかせた。京都一中に入っても、この孤独癖はあいかわらずで、トルストイを読み、人間には誰でも悩みがあることに気づき、小窓を開けてそっと外界をうかがうように毎日生きながら、「互いに傷つけ合うことは哀しいことだと気づいた時、私はやはり人の接触をなるべく避けるようにした。」読書は次第に東洋哲学に傾斜し始め、『中庸』から入って『老子』、『莊子』に感銘を受けた。湯川少年はあまり世間と交渉を持たないですむ生き方で一生を送りたいと思った。それには好きな勉強ができればよいという気分が次第に昂じていった。

少年の頃は忘れず縁側に

ひとり積み木の家を造りし

自己表現のうまくない、無口で、それでいていささか独断的な物の見方を示す湯川少年を、父は「あの子は何を考えているかわからん」といい、自分や上の二人の子のように学者にするのは間違いではないかと妻にそれとなく打診した。ひたすら気性の激しい夫につかえた物静かな妻はこのとき毅然として答えた。「目立たない子もあるものです。目立つ子や、才気走った子が、すぐれた仕事をする人間になるというわけではございますまい。それにどの子にも同じようにしてやりたいと思います。」実に明快で温かみあるいい言葉だ。湯川少年も、聡明で優しい母親に見守られていたのである。妻の言葉を胸に収めながら父琢治はある日、京都一中の森外三郎校長にあってたずねた。「専門学校でも選ばせようと思いましたが。」イギリス流の紳士育成と自由主義教育をモットーとした名校長は答えた。「秀樹君はね・・・頭脳が飛躍的に働く。着想が鋭い。天才的なところがある。私がお世辞でもいうと思われるのなら、私はあの子を



後列左より環樹、茂樹、秀樹、滋樹。前列は父小川琢治と母小雪。1931年頃

もらってしまっていていいです。」

母親の一言が引き金となって三高への進学がきまった。

(生母の死に遭ひて)

ななたりの子等は集へり

耳近く呼べど応へぬ夜の深みに

**スミ夫人と隠し黒板** 湯川博士は昭和7年に医者のお嬢さんと結婚した。このお医者さんは、夏目漱石が胃潰瘍をわずらった時入院したことがあり、彼の小説「行人」の中でモデルとして描かれている大阪今橋の胃腸病院長湯川玄洋である。新婚当時、スミ夫人は湯川博士に、「医者の妻ならばなんでもわかりますが、学者の妻のことはわかりません」と不安を訴えると、博士は、「自由に勉強させてくれれば良い」と答えたという。

湯川博士のノーベル賞受賞の対称となった中間子仮説が生まれる頃の状況も、博士の著書「目に見えないもの」から知ることができる。少し長いがその中から引用してみよう。『毎日大学へ出て朝から夕方まで勉強しても結局同じ所で行き詰まってしまう。頭も身体も疲れ切って家路を辿る頃には、夕日が西山へ沈みかけている。それを眺め何とも言えない絶望感に襲われたことが何度あったかしれ

ない。その時には心底から自分は理論などやっても駄目なのだと思った。しかしあくる日になるとまた元気を出して勉強した。

今日もまた空かりしと橋の上に

きて立ちどまり落つる日を見る。

昭和9年の秋、関西に大風水害があった。私は当時養父母とともに西宮市の山手の苦楽園に住んでいたが、幸いに風の被害もなく、その直後に二男が生まれた。私はお産の直後、一人で奥の間に起臥しながら、一心になって核力の問題を考えていた。その結果少し不眠症になったと見えて、昼間は何か頭がぼんやりしている。そのかわり夜になるとなかなか寝つかれず、だんだん頭が冴えてきて、それからそれへといろいろな考えが頭に浮かぶ。朝になって忘れてしまうのが惜しいので、枕元にスタンドとノートを用意しておいて、考えがまとまる毎に起き上がって書きつける。しかし妙なもので、その時には一かどの妙想だと思ったものでも、翌朝読み返してみると、一向に詰まらぬ場合が多いのである。こんなことを繰り返している間にいつとはなく核場の構想が、明瞭な形を帯びてきたのである。』

夜中に湯川博士がとび起きてスタンドをつけ、ノートにペンを走らせはじめると、スミ



左からニールス・ボーア博士、湯川夫妻、ロバート・オッペンハイマー博士(写真・ニールス・ボーア研究所)

夫人は生まれたばかりの子どもを抱いて他の部屋に行き、スタンドの明かりが消えると部屋に戻るとというのが習慣だったという。

11月17日には東京帝大物理学教室で開かれた数学物理学会で中間子仮説を発表した。さらに、スミ夫人が、「早く英語の論文を書いて、世界に発表されたら如何ですか」と毎日のように、勧めるので月末までに英文の論文をまとめあげた。だが、学会の大勢は、湯川博士の説を認めようとしなかった。第一に評価したのは坂田昌一や、京大で坂田や小林 稔とともに湯川博士の講義をきいていた武谷三男であった。理研の仁科芳雄や朝永振一郎も関心を示し、仕事の話をする、「そいつは面白そうじゃありませんか」と耳を傾けてくれた。

苦楽園の湯川邸は今は三分割されてすっかり変わっているが、昔のおもかげは残っているらしい。傾斜地に建てられていて、昔は低い方の二階から高い方の一階に通じていたがその高い方の家に、「隠し黒板」があったという。昔の大学人たちは、黒板を前にして、議論し、構想をめぐらすのが常であったから、湯川博士が、わが家に黒板が欲しいと思われたのは当然であろう。それを実現したスミ夫人の視点の高さはさすがである。スミ夫人の数々の内助の功は夫婦においても善意が善と

なるためには叡智がともなわなければならないことを教えてくれる。小人の器度をもつ妻にとってとはたとえ湯川博士のような大天才でも亭主はただの亭主に過ぎなかったであろう。20才そこそこで、湯川博士のものごつい才能を直観的に見抜き、夫の非凡な生き方に押しつぶされることなく、積極的に夫の研究を支えたスミ夫人は文句なく超一流の賢夫人といえよう。

(湯川博士は多くのすぐれた短歌を残しておられる。文中の短歌は筆者が勝手に選んで挿入したものである。)

(昭和20年も暮れんとして)

雪ちかき比叡さゆる日々

寂寥のきはみにありてわが道つきず

#### 参考文献

- 1) 湯川秀樹「目に見えないもの」講談社 (1976)
- 2) 宮田親平「学者たちの自由な楽園」文芸春秋 (1983)
- 3) 伏見康治「学者の手すさび」みすず書房 (1986)
- 4) 桑原武夫編「湯川秀樹」日本放送出版 (1984)

(化学科 学科長)